えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ㉑⑥

四国平定前夜の緊迫感

毛利輝元が、石見（島根県）の三隅養仙（寿久）に宛てた書状。同じ石見の吉見広頼に伊予へ300人を派兵するよう命じた旨を伝えている。

羽柴（豊臣）秀長も阿波方面に出陣した1585（天正13）年の四国平定では、伊予へも毛利氏の軍勢が渡海し、東予で長宗我部氏に従う勢力と交戦した。これは中央の秀吉政権による戦いであったが、実は前年の84年にも両大名は南予で衝突していた。

毛利氏と同盟する河野氏が、83年末ごろから喜多郡の平定を企て、毛利氏に加勢を要請した。これを察知した長宗我部氏は、喜多郡の与同勢力を気遣い、河野・毛利を警戒。毛利氏の加勢がなかなか実現しない中、84年7月に河野通直と毛利輝元の当主会談で加勢が合意にいたると、9月に長宗我部氏は宇和郡へと侵攻した。そして、10月末ごろには毛利勢先遣部隊も駐留する喜多郡肱川下流の諸城を制圧した。

この長宗我部氏の進撃を知った毛利輝元は、本書状にも「道後（河野氏）が火急の事態のため軍勢を派遣する」と記すとおり、河野氏の苦境を打開し支援するために、長宗我部勢への応戦のための増援として、諸将に南予渡海を命じた。本書状はその一環で、遠く山陰の国衆まで動員したのである。

ただ、渡海を命じられた吉見広頼には、実は伊予との深い縁があった。広頼の娘は輝元の姪（めい）でもあることから、河野通直に嫁ぎ同盟強化に貢献していた。通直の妻の実家だったことが、渡海命令の背景にあったのかもしれない。しかし、実際に吉見勢の渡海の事実が確認できないまま、11月下旬には長宗我部勢の動きは見えなくなり、毛利氏の応戦部隊派兵も立ち消えとなった。

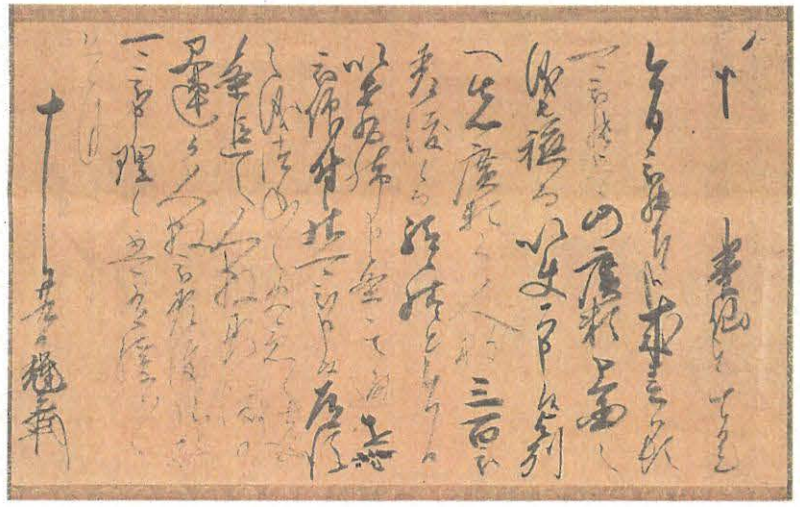
毛利氏と長宗我部氏は、実は以前から伊予領有をめぐり秀吉と交渉を重ねており、領有交渉が断続的に続く中で、現地の南予では直接の軍事衝突が起きていたのである。双方の派兵の裏に、伊予領有権獲得への思惑があった可能性は否定できないだろう。最終的には、四国平定で長宗我部氏は攻撃対象となり、伊予は毛利（小早川）領国となる。

四国平定前夜の緊迫した時代に、戦国大名を巻き込み展開された南予の争乱の一端を伝えている。

（学芸主幹・山内治朋）

〈随時掲載します〉

毛利輝元の書状



毛利輝元が三隅養仙に宛てた1584（天正12）年10月29日の書状（県歴史文化博物館蔵）

掲載許可番号：d20230301-04